



慶應義塾

杉並三田会



読書会

世話人 高橋あかね 44文



開催日: (奇数月・1月3月5月7月9月11月の第四金曜日)

開催場所: 荻窪 石橋亭

9月23日 読書会・9月例会

9月23日、荻窪石橋亭にて読書会九月例会が開催されました、出席者は16名、担当者は野水清さん、テキストは「生きて帰ってきた男・ある日本兵の戦争と戦後」小熊英二智、岩波新書でした。著者の小熊英二さんが、父・子熊兼二の幼い時から現在に至るまでの生活史を丹念に聞き書きして上梓した作品です。兼二は1925年に北海道佐呂間村に生まれ、現在も健在ですが、激動する昭和時代の波をもろにかぶった人生と言えます。自分自身では自分の出身階層を「下の下」と語っています。豊かではない幼少年時代を送りますが、兄の進言により親類の中で初めて中学を卒業して会社に勤務します。終戦間近の1944年に徴兵により、満州に出征、戦後はシベリアに抑留され、1948年に帰国しますが、出征前に勤務していた会社にはシベリア帰りということで再雇用されません。職業を転々としているうちに結核を発病、療養後、高度成長の波に乗って成長する中小企業に就職して、やっと生活が安定してきます。退職後は地域の住民活動に励むかたわら、シベリアに日本兵として抑留されていたけれど、日本国籍を持たない朝鮮人のために、補償金を要求する裁判の原告になる、などの活動をします。苦勞の多い人生ともいえますが、他者を恨むことなく、常に希望を失わず、弱い立場の人達を視野にいれて行動した、小熊兼二さんのさわやかな生き方に感銘を受けました



1月27日・読書会一月例会

読書会一月例会は1月27日(金)6時半より荻窪、石橋亭で開催されました。出席者は12名、担当者は松井滋さん、テキストは岡本綺堂著・読んで、半七！半七捕物帳傑作選一・筑摩文庫でした。副読本は筑摩文庫から出版されている岡本綺堂・筑摩日本文学032で、これには有名な「修善寺物語」が掲載されています。岡本綺堂は脚本家であると同時に半七捕物長などの小説を書いた作家です。「文学座」の発起人として、活動の拠点を演劇活動に置く一方で多くの小説を世に問うた獅子文六(岩田豊雄)と一脈通じるところがあるような気がいたします。二人とも、西欧文学の知識を持ち、演劇界に多大な貢献をすると同時に、肩の力を抜いて書いた小説の分野でも多くの読者を魅了しました。

半七捕物帳は、江戸のシャーロック・ホームズともいわれる半七が次々に胸のすくような謎解きをする物語で、読み始めると面白くて、読むのをやめられません。岡本綺堂は明治5年、芝高輪に生まれ、昭和14年に没しました。若い時から父に漢詩を、叔父とイギリス公使館の留学生から英語を学び、その語学は、生涯創作の材料として西欧の小説を原書で読むのに役立ちました。半七捕物帳だけでなく、戯曲「修善寺物語」「権左と助十」なども合わせて、お読みいただけたら、面白いと思います。 —感想文—



3月24日 読書会三月例会

読書会三月例会は3月24日石橋亭にて開催されました。出席者は17名・担当者は久津正行さん・テキストは「ベルギー大使の見た戦前日本」アルベール・ド・バツソンピエール著・講談社学術文庫でした。著者のアルベール・ド・バツソンピエールは1921年から1939年まで駐日ベルギー大使として滞日、その間に遭遇した日本の多くの著名人との交流の様様、関東大震災・5・15事件・2・26事件などについて、生き生きとした筆致で、描き出しています。当時の日本は、軍部の台頭・農村の困窮・社会的格差の拡大などが、社会の背後で通奏低音のように鳴り響き、第二次大戦へと近づきつつある時代でしたが、その一方で、資本主義経済の発展により、上流、中流の人々は文化的な生活を享受していました。多くの上流社会の人々との交流を通して、当時の日本社会の様相が伝わって来ます。千代田区二番町の本立の中に今も佇むベルギー大使館周辺の、当時の様子も詳しく記されていて、現在は失われてしまった戦前のお屋敷町の風情が、想起されます。本書の中の一章にアメリカ大使・ジョゼフ・グルーについての記載がありますが、昭和史に痕跡を残した興味深い人物なので、興味のある方はネットその他でお調べになってみてください。

